

卒業後の私

本多 亜充 (平成22年3月 文学部国文学科卒業)

1. 学生時代に得たもの

教職を目指し、歩んできた中で、学生時代に得たものが今につながっていると感ずることがあります。

まず、教科指導において、「深く知っているからこそ、簡単な内容まで絞り込み、わかりやすい授業を行う」という古典作品の指導への自信は、専門分野を追求する学びを、大学で精一杯やったといえる努力をしたからこそ得られたものだと思います。

また、私自身のコミュニケーション能力と問題解決に向けての思考力と判断力は、大学の授業に加え、サークル活動や石垣祭実行委員、文化会役員などの活動を通して経験してきたことが土台となっています。人間関係に悩んだり、企画運営が上手くいかなかったり、苦い経験や失敗もたくさんしました。自分自身がその経験を無駄にはしないと逃げずに、本気で向き合ってきたからこそ、いま関わる生徒にも熱く語るができます。

やはり、生徒の心に響くのは、綺麗ごとではなく、教師自身が経験したからこそ語ることのできる言葉です。皆さんが真剣に向き合ってきたものは、必ず未来の自分の力になるはずで。

2. 教員採用選考試験合格までの道のり

私は卒業と同時に地元長崎へ戻りました。現在の勤務校を合わせると9校の公立中学校に常勤講師として勤務したことになります。

講師は、研修も何もなく、正職員と同じように働くことになります。与えられる授業の時間数も、部活の指導も当たり前であり、できるものとして日常業務が進んでいきます。実際、最初の3年間は、目の前のことに精一杯で、採用試験に向けての勉強時間を確保する余裕はなく、満足いく勉強なんてできませんでした。4年目以降になると、業務も覚え、授業実践を積み重ねたことで、気持ちの余裕はできましたが、一次試験に合格できないまま8年が過ぎました。その間、負けず嫌いで中途半端なことができない性格からか、目の前の業務や生徒と過ごす時間を優先している自分がいました。全力でやっていたのですが、勉強時間が足りていない事実から目を背けていたのだと思います。

しかし、講師9年目となる一昨年、現役受験のときと合わせて10回目、やっと一次試験の突破を果たしました。しかし、二次試験の結果は不合格。11回目となる昨年、やっと合格し、令和2年度から正規の教員として働きます。よく諦めなかったなと自分でも思い

ますが、半人前である講師の私を「先生」として信じて慕ってくれた教え子がいたからこそ、教員採用選考試験に挑み続けることができたのだと実感し、その子たちに恥じない教師になりたいと思っています。



3. 合格するために変えたこと

まず、優先順位を大きく変えました。一番削ったのが部活動指導の時間です。9年目に担当した部活動は、毎日きてくださる外部指導者がいました。4月初めに、頭を下げ、採用試験まで勉強に専念する時間を下さいと頼みました。指導者と時間を分担し、家では勉強する時間を生み出しました。最後まで指導につかないと気が済まないという自分の気持ちに蓋をし、優先順位を見直しました。それが大きく一次試験の突破につながったと思います。

そして、自分の欠点を見つめ直し、自分を変える努力をしました。そのために面接対策に力を入れ、時間が許す限り、管理職や先輩職員に指導を仰ぎました。受けた指導の中には、厳しいものもありましたが、欠点として受け止め、冷静に分析し改善する努力をしました。もし変なプライドで、自身のスタイルを変えることができなかつたら、合格はなかったと思います。

優先順位を決める時、中途半端になることはやめる勇気も必要です。欲張ると中途半端になることが多いです。学生の皆さんも、自身の目標達成のために、本当に必要なことは何か、優先すべきことは何か考え、現状や自分を変える勇気をもってください。

4. 教職課程履修の皆さんへ

これまでの人生で、難病の兄や家族など、自分ではどうにもできない境遇に嘆きたくなる経験もたくさんしてきました。しかし、夢を諦めたくない、どんな状況でも生き方は選べると強く思って進んできたなら、時間はかかりましたが、このたび合格できました。「覚悟を決めて、行動すれば状況は変えられるし、必ず変わる」。人はその力をもっていると信じています。

皆さんも、進むと決めた道を簡単に諦めないでください。たくさん悩んで、立ち止まっています。諦めない限り、道はつながっています。教職の道を歩む皆さんの活躍を祈っています。